

I. 民数記 8 章で集会の天幕に関する多くの詳細は言及されていませんが、神は特にアロンに燭台のともし火をとますように指示しました: **民 8:2-3** アロンに語って言いなさい、「あなたがともし火を置くときは、七つのともし火が燭台の前方に光を照らすようにしなければならない」。そこで、アロンはそのようにして、エホバがモーセに命じられたとおりに、燭台の前方に光を照らすようにそのともし火を置いた。

A. 民数記 7 章でのイスラエルの十二部族のささげ物の後、神はモーセにともし火をとますように指示しました。民数記 8 章 1 節から 2 節は言います、「エホバはモーセに語って言われた、…『あなたがともし火を置くときは、七つのともし火が燭台の前方に光を照らすようにしなければならない』」: **1.** 七つのともし火は、七つの霊を表徴し、燭台の前方を照らし、幕屋の中央に向かって輝きました。ですから、ともし火の輝きは奉仕と行動のための正しい方向にありました。この時点で、神の民は彼に対して霊的な奉仕を開始することができました。 **2.** ともし火をとます唯一の目的は、ささげること、戦うこと、行動することのためでした。ささげること、戦うこと、行動することはすべて、光を必要とします。

B. 光の輝きがなければ、イスラエルの子たちは行動することができず、まして神のために戦うことはできませんでした。ですから、民数記 7 章で見られるように、彼らは神に何かをささげた後、直ちにともし火をともし、光を輝かせました。

C. もし神の民が神にある物をささげるなら、彼は彼らの間で輝き、彼らは光を持ちます。神の民は神の軍隊となるために、光を持って、戦い、歩き、奉仕しなければなりません。 **ローマ 13:12** 夜はふけて、昼は近づきました。ですから、暗やみのわざを脱ぎ捨て、光の武具を着けようではありませんか。 **【月】**

II. 燭台の光は、祭司の奉仕の強さに基づいています:

A. サムエル記上で、神のともし火は消えかかっていた。なぜなら、祭司エリは弱く、墮落していたからです。 **サムエル上 3:2-3** ある日、エリは自分の所で寝ていた。彼の視力は衰えてきて、見ることができなくなっていた。神のともし火はまだ消えていなかった。サムエルはエホバの宮で寝ており、そこに神の箱があった。 **B.** 私たちが祭司の任務を果たさず、香をたかず、ともし火をともしないなら、地方集会における光は明るくなることはできません。 **C.** 民数記 7 章は、集会の天幕の中での神の語りかけをもって終わります。8 章は、光のためにともし火をとますことに関する、神の継続する語りかけをもって始まります: **1.** この順序が示しているのは、神の言葉が来るときはいつでも、彼の民は光を受けるといことです。こういうわけで、祭司エリの時代に、エホバの言葉はまれであり、聖所のともし火は消えかかっていたのです。 **2.** 召会において神の語りかけがあるときのみ、光は神の民の間で明るく輝くことができます。燭台の光のゆえに、務めをする祭司は務めをし、行動することができました。 **3.** さらに、同じ方向に光を照らす七つのともし火が表徴するのは、それぞれの人はからだの中での区別のある務めを持っているが、彼らの方向は同じであり、彼らの務めは依然として一つの務めであるということです。 **4.** 例えば、パウロは彼の務めを持っており、ペテロは彼の務めを持っており、ヨハネは彼の務めを持っていました。それにもかかわらず、彼らの方向はキリストに向かっていた。彼らは共にキリストのために証しました。彼らの光はキリストから輝き出て、キリストに向かって輝きました。このゆえに、彼らの務めは一であったのです。 **【火】**

III. 「あなたはイスラエルの子たちに命じて、叩いて取ったオリブの純粋な油を明かりのために持って来させ、ともし火を絶えず燃やしておかなければならない。集会の天幕の中、証しの箱の前にある垂れ幕の外側で、アロンとその

子たちは、夕から朝まで秩序正しく、エホバの御前でそのともし火を整えなければならない。それは、イスラエルの子たちが代々にわたって守るべき永遠のおきてである」: **出 27:20-21** また、あなたはイスラエルの子たちに命じて、叩いて取ったオリブの純粋な油を明かりのために持って来させ、ともし火を絶えず燃やしておかなければならない。集会の天幕の中、証しの箱の前にある垂れ幕の外側で、アロンとその子たちは、夕から朝まで秩序正しく、エホバの御前でそのともし火を整えなければならない。それは、イスラエルの子たちが代々にわたって守るべき永遠のおきてである。

A. オリブの木はキリストを表徴し、叩いて取ったオリブの油は、キリストの肉体と成ること、人の生活、十字架、復活の過程を通して生み出されたキリストの霊を表徴します。 **B.** 「ともし火を絶えず燃やして」は、文字どおりに、「ともし火の光を昇らせて」を意味します: **1.** 燭台は、三一の神の具体化としてのキリストを表徴し、純金でできていたが、燃えて光を発した灯心は植物の命でした。灯心は燃えて光を照らすために、油で浸透されなければなりません。 **2.** 灯心はキリストの高く上げられた人性を表徴し、神聖な油で燃えて、神聖な光を照らし出します。 **【水】**

C. 集会の天幕としての幕屋は、神が彼の贖われた民に会い、彼らに語った所であって、召会の集会を予表します: **レビ 1:1** さて、エホバは集会の天幕の中からモーセを呼んで、彼に語って… **1.** こうして、予表において、ともし火をとますことは、集会する正しい方法を指しています。召会の集会で行なうあらゆることは、祈っても、歌っても、賛美しても、預言しても、ともし火が輝くようにすべきです。これが神の聖なる所でともし火をとますことであり、それは光が暗やみを飲み尽くすためです。 **2.** 「証し…の前」とは、垂れ幕の後ろにあった箱の中の律法の前を意味します: **a.** 神の民の集会は大部分、聖所の中にあり、至聖所の中ではありません。しかしながら、私たちは至聖所に入ることを期待して、聖所で集会します。 **b.** ともし火の光は、私たちがキリストのさまざまな面(聖所の器具によって表徴される)を見ることができるようし、また至聖所に、すなわち神の内側にあるキリストの深さへと導く道を見ることができるようになります。 **【木】**

D. ともし火をとます聖なる仕事は、聖なる人(祭司)の奉仕であって、普通の人々の奉仕ではありませんでした: **1.** 聖書全体によれば、祭司は神によって所有され、神で満たされ、神で浸透され、絶対的に神のために生きる人です。さらに、祭司は祭司の衣を着なければなりません。その衣は祭司の体系から生かし出されるキリストを表徴します。 **出 28:2** そして、あなたの兄弟アロンのために、聖なる衣を作って、栄光のため、また麗しさのためとしなければならない。 **2.** 聖所でもともし火をとますことは、このような人の奉仕を必要とします。 **啓 1:6** 私たちを王国とし、彼の神また父の祭司としてください。栄光と権能が永遠にわたってあるように。アーメン。 **E.** 聖所の中の光は、天然の光や人工の光ではありませんでした。それは金の燭台から、すなわち、キリストの神聖な性質から来る光でした。 **F.** 私たちは召会の集会で真にともし火をとますことを経験するために、燭台としての三一の神の具体化であるキリスト、金としての神聖な性質、灯心としてのキリストの高く上げられた人性、キリストの過程のすべての段階を伴う油としてのキリストの霊を持たなければなりません。私たちはまた祭司として聖なる人となり、祭司の衣としてのキリストの表現を着なければなりません。 **G.** 祭司たちは夕から朝まで、エホバの御前でともし火を維持すべきでした: **1.** 出エジプト記 27:21 では昼について何も言われていません。今の時代は夜であって、昼ではありません。 **出 27:21** 集会の天幕の中、証しの箱の前にある垂れ幕の

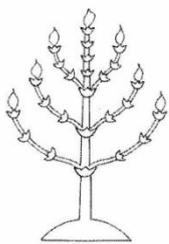
外側で、アロンとその子たちは、夕から朝まで秩序正しく、エホバの御前でそのともし火を整えなければならない。それは、イスラエルの子たちが代々にわたって守るべき永遠のおきてである。2. ですから、この夜の時代にあつて、私たちは夜が明けるまで、この光が輝くことを必要とします。【金】

IV. 金の燭台の七つのともし火は、神の御座の前の七つの霊であり、神の御座の前で燃えている七つの火のともし火です：啓4:5 御座からは、いなずまと声と雷鳴とが發している。そして七つの火のともし火が、御座の前で燃えていた。この七つの火のともし火は、神の七つの霊である。A. 神は宇宙において、行政の中心である彼の御座を持っています。B. 神は彼の御座から行政を執行し、行動しており、彼の永遠の政策を遂行します。C. 神の御座の前で燃えている七つの火のともし火が表徴するのは、七つのともし火が神の行政、エコノミー、行動と絶対に関係があるということです。V. 私たちは神の行政とエコノミーを知るために、輝き照らす七つのともし火から、金の燭台の光を得なければなりません：A. 天然の光は、私たちが神のエコノミー、行政、永遠の定められた御旨を知るのを助けることはできません。B. 燭台の光は、聖所における光です。聖所は召会を予表します。C. 私たちは召会の領域の中へと入るなら、照らされて神の永遠の定められた御旨、神の心の意図、神のエコノミーを知ります。私たちはまた神の目標に向かって私たちの前にある行程を行くために、どの道を取るべきかを知ります。D. 神の聖なる所で(私たちの霊の中、また召会の中で)、私たちは神聖な啓示を受け、私たちのすべての問題に対する説明を得ます。詩73:16-17 私がこれを理解しようと考えたとき、私の目にそれはめんどろなことであった。私が神の聖なる所へと入り、彼らの最後に気づくまではそうであった。VI. 啓示録4章によれば、燃える七つの火のともし火の強調点は、神の行政の行動にあります：A. キリストは地上の諸王の支配者として、御座の前で燃える七つの霊によって、彼の委託を遂行し、主権をもって世界情勢を支配しています。それによって環境は、神の選びの民が神の救いを受けるのにふさわしくなります。B. 燃える七つの霊の炎は、召会を裁き、純粋にし、精錬して、金の燭台を生み出します。C. ともし火が燃えることは、輝き、燃やすためだけでなく、私たちが動機づけ、立ち上がらせて、事を行なわせ、神のエコノミーを遂行させるためです。【土】

用語の説明

A. 祭司の衣：もし私たちが日常生活でキリストの表現を持たないなら、召会の集会で何であれ偽善となるでしょう。…もし私たちが祭司の衣を持っていないなら、ともし火をともしように資格づけられておらず、装備されていません。祭司が聖所でともし火をともしするための資格はキリストの表現です。

B. 聖所の中の燭台(Lampstand):



この燭台には、七つのともし火(Lamp)があります。これは神の七倍に強化された霊の予表です。燭台は一つですが、ともし火は七つあります。同様に、神の霊は一つですが、照らし、燃やす機能において七倍に強化されています。

Crucial Point①: 神の語りかけはともし火の火をもたらず
OL1: 燭台の光は、祭司の奉仕の強さに基づいています。サムエル記上で、神のともし火は消えかかっています。なぜなら、祭司エリは弱く、墮落していたからです。
OL2: 民数記7章は、集会の天幕の中での神の語りかけ

をもって終わります。8章は、光のためにともし火をともしることに関する、神の継続する語りかけをもって始まります。この順序が示しているのは、神の言葉が来るときはいつでも、彼の民は光を受けるといことです。

各地方召会はとても明るく輝いているべきです。ひとたび人がその中に入ると、すべての人の状態が完全に暴露されて、「神は確かにあなたがたの間におられます。なぜなら、私の秘密はあなたの光の照らしの下で完全にあらわにされてしまったからです。この光はエックス線よりもさらに深くにまで達します」と言わざるを得ません。召会は聖所であり、召会は燭台…です。

そればかりでなく、召会には香をたく(香をたくとはキリストの功績を持って祈ることです)祭司職があります。…私たち一人一人には祭司職に分があります。私たちはみな王であり、祭司です。私たちはみな香をたくことで任務を果たすことを学ばなければなりません。ともし火をともしるとき、私たちは香をたかなければなりません。…私たちは夜と朝に祈って、神の光を私たちの間で明るく輝かせなければなりません。その光の照射が宇宙における神の行動、神の行政、神の統治、また今日の地上での神のエコノミーとなるよう、その光は明るく輝くべきです。これは小さな事柄ではありません。神の言葉が来るときはいつでも、彼の民は光を受けます。それゆえに、祭司エリの時代に、エホバの言葉はまれであり、聖所のともし火は消えかかっていたのです。召会において神の語りかけがあるときのみ、光は神の民の間で明るく輝くことができます。

適用: 青年在職、大学院生編

ビジネス・パーソンあるいは研究者であるあなたは、毎日、神の言葉を聞き、霊を燃え立たせている必要があります。神の言葉がなければ、光はなく、暗闇になってしまいます。エリの時代、神の言葉がまれであったので、光がほとんどなく、暗黒の時代でした。あなたは、「一週間のうち2日ぐらいは朝毎の復興をしなくても、五勝二敗なので悪くない」などと考えるはいけません。神の言葉に欠ける、光に欠けることは極めて重大な問題です。一週間に七回の朝、毎朝復興しなければなりません。あなたが御言葉を祈り読みせず、光を持たずに暗闇の中で、その日試練が来たとき、どのようにして正しく対応することができるのでしょうか？ ですからあなたにとって毎朝復興を一年間に365回実行することは極めて重要なことです。毎日食事を食べなければ容易に病気になってしまいます。同様に毎朝、祈り読みしなければ容易にサタンにまわってしまいます。あなたは必ず毎朝復興の習慣を建ててください。

あなたはビジネス・ライフや研究生活が忙しいので、朝毎の復興や召会生活をする時間や力がないと言っははいけません。あなたはやればやるほどできるのです。ともし火があなたの内側で燃えて、あなたがさらにできるように動機づけられますように。

責任者の兄弟の証し: ビジネス・ライフにおいて様々な昇進の機会を経験しました。最初の頃、それが主の祝福なのか、サタンの誘惑なのか識別することが難しかったです。その当時、私の朝毎の復興の実行は、週に「六勝一敗」のような状況で、光に満ちていたわけではありませんでした。しかし20年位前から、朝毎の復興を力を尽くして、徹底的に行うようにしています。このことは、私に光を与えて、会社の中で誘惑や試練から逃れさせる力を与えてくれました。2016年10月に米国本社の役員に就任する誘いがありました。その約一週間前に、主と召会の交わりの中で、「仕事が忙しすぎるので、会社を辞める」と決心していたので、主の光の下で、直ちに何の迷いもなく、その昇進

の誘いを断ることができました。その結果、もっと多くの時間を召会の奉仕に使うことができるようになり、召会を前進させることができるようになりました。主に感謝します。

さらに、あなたは召会の祈りの集会、小組の集会、主日の集会に参加して、朝毎の復興やビジネス・ライフなどで経験したキリストを、霊を活用して発表し、人々にキリストを供給してください。召会のすべての兄弟姉妹がこのようにすれば地方召会はますます明るくなるでしょう。

祈り:「おお主イエスよ、あなたの御言葉は私にともし火の光を与えます。私が一年に 365 回、あなたの御言葉を祈り読みし朝ごとに復興され、神の語りかけを聞き、光をもって一日を始めることができますように。地方召会がますます明るく輝くために、ビジネス・ライフや研究生生活で経験したキリストを集会で語り出して、他の人を供給することができますように。アーメン！ ハレルヤ！」

Crucial Point②: 油で浸された人性を持ち、燃え続ける

OL1: オリーブの木はキリストを表徴し、叩いて取ったオリーブの油は、キリストの肉体と成ること、人の生活、十字架、復活の過程を通して生み出されたキリストの霊を表徴します。

OL2: 燭台は、三一の神の具体化としてのキリストを表徴し、純金でできていましたが、燃えて光を発した灯心は植物の命でした。灯心は燃えて光を照らすために、油で浸透されなければなりません。灯心はキリストの高く上げられた人性を表徴し、神聖な油で燃えて、神聖な光を照らし出します。

燭台は三一の神の具体化です。金には御父の性質、神聖な性質があり、燭台の形、形状には御子があり、燭台のともし火にはその霊の表現があります。ですから、…聖所の光は三一の神から来ます。この金の燭台に、混合はありません。灯心を除いて、すべては金です。

燭台の光は、灯心が燃えることから来ます。…灯心はキリストの人性を表徴します。そうです。キリストは神聖であり、金です。しかし、灯心によって表徴される彼の人性が、油で燃えるのです。もし灯心が油で浸透されていなかったなら、光るのではなく煙を出すでしょう。こういうわけで、**出エジプト記 27:20** は、「叩いて取ったオリーブの純粋な油を明かりのために持って来させ、ともし火を絶えず燃やしておかなければならない」と語っているのです。

ともし火の中心には灯心がありました。これらの灯心は金ではありませんでした。そうではなく、それは植物の命からでした。金は燃えないので、光を放つことはできません。灯心が燃えて光を放ちます。しかしながら、灯心がそれ自身で光を放つのはとても難しいのです。光を放つのではなく、煙を出します。こういうわけで、光を持つために灯心を油で浸透させる必要があります。

予表で油は神の霊を表徴します。油はオリーブの木から来ます。オリーブの木はキリストを表徴します。神の目に、キリストは真のオリーブの木です。

ともし火の内側には灯心があり、その灯心はキリストの人性を表徴します。灯心は油で燃え、油は神の霊を表徴します。私たちが今日持っているものは神の霊だけでなく、キリストの霊です。神の霊はキリストの霊となりました。オリーブが手順を経過してオリーブ油を生み出すように、キリストの霊は手順を経過しました。今日私たちにあって、灯心を燃やす油はキリストの霊を表徴します。

適用: 中高生、大学生編

ともし火の中心は灯心であり、それは植物からできています。灯心は油を吸収して、燃え、光を放ちます。ここで植物の命は、人性を表徴しています。キリストは地上で生活しておられたとき、彼の人性は油で浸されて

いました。同様に、あなたの人性は油で浸されていないければ燃え続けることはできません。小学校 4 年生くらいにアルコールランプの実験を経験したと思いますが、このともし火は、基本的にアルコールランプと同じです。あなたの人性が油で浸され、あなたの内側が燃え続けるために、以下のことを行ってください:

(1) 毎朝復興: この点は在職青年編を読んでください。

(2) 同年代の仲間と共に召会生活をエンジョイする:

Ⅱ テモテ 2:22 ただし、あなたは若い時の欲から逃れなさい。そして純粋な心で主を呼び求める人たちと共に、義、信仰、愛、平和を追い求めなさい。あなたには同世代の霊的パートナーが必要です。互いに祈り合い、共に詩歌を賛美し、御言葉を祈り読みし、一緒に集会に参加する霊的パートナーを持ってください。そうすればあなたは召会生活の中で守られ、前進することができます。

(3) あなたを導く兄弟姉妹が必要である: **ヘブル 13:7** あなたがたを導き、あなたがたに神の言を語った人たちを覚えなさい。そして彼らの生活の仕方の成果を心にとめて、彼らの信仰に倣いなさい。同世代のパートナーだけでなく、あなたにはあなたを導く牧者が必要です。彼らは神のエコノミーの観点から神の御言葉を語り、あなたを供給し、導きます。

(4) 主日集会と家庭集会に参加する: あなたは幼い時から主日の午前中を主のために聖別してください。このことはあなたに祝福をもたらします。またウィーク・デーに兄弟姉妹と一緒に御言葉を読んだり、祈ったりする時間を 10~30 分位持ってください。このような家庭集会は LINE などで行うこともできます。

(5) 大学生や高校生の兄弟姉妹が小中学生を訪問する: 大学生や高校生は、小中学生の兄弟姉妹を訪問し、牧養してください。祝福する人が祝福されるので、あなたが訪問を実行すれば、油で満たされた人になるでしょう。

祈り:「おお主イエスよ、私が燃え続けるために油で満たされた人にしてください。毎朝復興され、仲間と導く兄弟姉妹と共に燃え続けることができますように。集会を尊び、時間を聖別します。また年下の兄弟姉妹を顧みることができますように。主が私に実行する恵みを与えてください。主の御名の中で求めます。アーメン！」

Crucial Point③: 聖所に入り、疑問に関する完全な説明を得る

OL1: 私たちは神の行政とエコノミーを知るために、輝き照らす七つのともし火から、金の燭台の光を得なければなりません。**OL2:** 神の聖なる所で(私たちの霊の中、また召会の中で)、私たちは神聖な啓示を受け、私たちのすべての問題に対する説明を得ます。

幕屋は、太陽の光も、月の光もなく、暗かったのです。しかしながら、聖所には金の燭台がありました。それには一つのともし火だけでなく、七つのともし火が輝き、照らしていたのです。…七つの輝くともし火の光が、幕屋の中での祭司の行動すべてを決定づけました。これが神の行政、統治、エコノミーの方法です。

詩篇 73 篇で、詩篇の作者は彼自身を困惑させる、理解し難い一つの状況を見ました。彼はそれを見れば見るほど、ますますそれは彼にとって不明確になりました。彼がそれを分析すればするほど、ますますそれは意味不明になり、ますます彼は当惑しました。最終的に、彼は言いました、「私がこれを理解しようと考えたとき、私の目にそれはめんどろなことであった。私が神の聖なる所へと入り、彼らの最後に気づくまではそうであった」(詩 73:16-17)。これは、彼が聖なる所である聖所に入った時に理解したことを示しています。同様に、私たちの間の多くの者たちも、「私が召会の中へと入り、それを理解するまではそうであった」と証しすることができます。私たちはたびたび問題に直面し、それを熟考した後

も、当惑したままです。それにもかかわらず、ひとたび私たちが集会に来るとき、直ちに理解します。…これは、なぜでしょうか？聖所には七つのともし火の輝きがあるからです。

私(たち)は召会の領域の中へと入っている限り、…私たちは内側ではっきりとします。私たちは人生に対する徹底的な理解を受け、神のみこころについて完全にはっきりとするでしょう。私たちは神のエコノミーについて水晶のようにはっきりとするでしょう。私たちはまた今日私たちのいる時代を知るようになるでしょう。これは、聖所の中の光のゆえです。…これは、聖所には御座があり、御座に座しておられる方がおられ、神の臨在があり、神の御座の前には、七つの燃える火のともし火の輝きがあるからです。ひとたび私たちがこの領域の中へと入るなら、直ちに私たちははっきりとします。私たちは神の永遠の定められた御旨、神の心の意図、神のエコノミーを知ります。私たちはまた、私たちの前にある行程を行くために、どの道を取るべきかを知ります。これは聖所の中の光のゆえです。

私たちは召会として共に集まって集会するときはいつでも、その集会は神の住まいの中にあります。このことを覚えておくことはとても重要です。私たちの集まりは聖なる所です。…私たちが建物の中で、あるいは戸外で集会しても、私たちの集まりは聖所です。こういうわけで、私たちは天然的方法や俗的な方法で集会すべきではないのです。私たちが集会の中で行なうあらゆること、すなわち私たちの語ること、歌うこと、賛美すること、呼ぶこと、叫ぶこと、祈り読みすることは、聖なる光を昇らせなければなりません。これが神の聖なる所でもし火をともしことであり、それは光が暗やみを飲み尽くすためです。

火のともし火の燃焼は、照らし、燃やすためだけではなく、動機づけるためでもあります。…御座の前では、私たちを駆り立てるために、七つの燃える火のともし火があります。おそらく、一部の人は自分にはできないと言うかもしれません。私たちがある事をしなければいけないほど、ますます私たちはそれができなくなります。これが聖書の原則です。持っているすべての者には、さらに与えられて、満ちあふれるようになります。しかし、持っていない者、すなわち、持っているのに使わない者は、持っているものまでも取り去られてしまいます。私たちができないのは、私たちがそれをやらないからです。…私はやればやるほど、できるようになります。

適用: 福音活動編

4月は福音開展の月間です。前半で24名バプテスマされました。これらの一人一人はすべて三一の神の働きと私たちの協力によってもたらされました。福音開展で重要なことを以下に列記します。**①福音は聖霊の働きである**: 福音は私たちの働きではありません。父なる神が永遠の過去に選び、子なる神が父の選んだ人を贖い、霊なる神が、父が選び、子が贖った人を探しています。私たちは福音に出て行って、霊なる神が探している平安の子に会いに行きます。三一の神の働きがなければ、私たちの福音の宣べ伝えは空っぽになり、何の効果もありません。**②何人かバプテスマできたからと言って、絶対に慢心してはいけません**: 私たちの天然の人は高ぶっているのです。何人かバプテスマすると、「自分は優れている」と高ぶって考えがちです。しかしこれはサタンのもやみです。高ぶってしまうと、神に敵対してしまい実際にはサタンの追従者になってしまいます。高ぶり、不注意などの罪を徹底的に告白して、聖霊で満たされます。**③福音をすればするほど、できるようになる**: 福音に参加しなければ、ますますできなくなり、実行すればするほど、ますますできるようになります。

④新人を聖所にもたらす: 人は聖所である召会の集会に来るまで、一見して矛盾した事柄につまずき、悩み、不平不満を言っています。私たちは聖所に来ることで、以前私たちが考えていた不平不満についての完全な説明を得ることができました。ハレルヤ! 今私たちは平安の中で神のエコノミーの路線の上を前進しています。福音を宣べ伝えることで新人たちにもこのような素晴らしい経験を提供することができるのです。ですから人が救われ、召会にもたらされると本当に大きな喜びがあります。**祈り**: 「おお主イエスよ、福音開展における祝福のゆえに感謝します。慢心せず、聖霊の働きに同労し、平安の子を探し出すことができますように。友人を火の池の滅びから救うだけでなく、聖所である召会の集会にもたらして、彼らの疑問に関する完全な説明を得させることができるのは、最高の喜びです。主を賛美します。」

I. 高い福音 第15課 バプテスマされる(上)

マタイ28:19 だから、行って、すべての諸国民を弟子とし、父と子と聖霊の名(名は単数)の中へと彼らをバプテスマして、バプテスマとは何でしょう

信じることは、奴隷一救い主を受け入れることであり、これは罪の赦しのためだけではなく、再生のためでもあります。信じた者たちは、三一の神との有機的な結合の中で、神の子供たち、キリストの肢体となります。バプテスマされることは、このことを確認することです。一面で水の中に葬られることによって、奴隷一救い主の死を通して旧創造が終わらされました。もう一面で、水から出てくることによって、奴隷一救い主の復活を通し、神の新創造になりました。信じることとバプテスマされることは、神の全き救いを受けるための、一つの完全な段階の二つの部分です。信じないでバプテスマされることは、単にむなしい儀式にすぎません。また信じてもバプテスマされないなら、内側で救われるだけで、外側の確認がありません。これら二つは並行すべきです。さらに、水のバプテスマには霊のバプテスマが伴うべきです。それは、イスラエルの子たちが、海(水)の中と雲(その霊)の中にバプテスマされたようにです。

バプテスマは形式や儀式ではありません。それは私たちがキリストと一体化されることを意味します。バプテスマを通して、私たちがキリストの中へと浸み込まれ、キリストを私たちの領域とします。それは、私たちがキリストの死と復活の中で、彼と一つに結合されるためです。

私たちは、第一の人、アダムの領域の中で生まれました。しかしバプテスマを通して、キリスト、第二の人の領域に移されました。私たちがキリストの中へとバプテスマされる時、彼の死の中へとバプテスマされます。彼の死は、私たちをこの世と暗やみのサタンの力から引き離し、私たちの天然の命、古い性質、自己、肉、さらに私たちのすべての歴史さえ終わらせました。

バプテスマの重要性

信じるとは、キリストの中へと信じることであり、バプテスマされるとは、キリストの中へとバプテスマされることです。信仰とバプテスマによって、私たちはキリストの中へと入り、こうしてキリストを着て、キリストに結合されて一となりました。正しく、純粋に、生きた方法で実行されたバプテスマは、信者を三一の神の名、神聖な名の中に入れます。すなわち、キリスト、生けるパースンの中へと、キリストの死、効き目ある死の中へと、キリストのからだ、生ける有機体の中へと入ります。それは信者が、キリストとの有機的結合だけでなく、彼のからだとの有機的結合の中へと入るためです。

さらに、バプテスマは信者を、彼らの古い状態から新しい状態へともちこたらし、古い命を終わらせて、キリストの新しい命をもって発芽させます。それは彼らが、三一の神の要素によって、キリストのからだ、有機体の中に生きるためです。